

日本語研究における文章論の成立と展開

石黒 圭 (国立国語研究所教授)

要旨

本稿は、日本語研究における文章論の70余年の学史を概観し、これからの文章論のあるべき姿を提言するものである。言語過程観を掲げる時枝誠記の提唱から生まれた文章論は接続論・段落論・文章構成論という3分野に分かれ、1960～80年代に大きな成果を上げた。しかし、1990年代以降、文章論は多様化の様相を見せるものの、言語主体の立場から時間的過程のなかで言語行為を捉えるという創生期の原点を見失い、研究は停滞しているように見える。そうした状況のなか、「文の生成に文章を見る」言語観と「時間の流れの中で文の組み立てを考える」言語観の二つを林四郎の文章論から学ぶ。そのうえで、その卓越した言語観をこれからの文章論に生かす方法として、筆者が実践している「読むこと」における後続文脈の予測、「書くこと」における作文の執筆過程、「話すこと」におけるフィラーの使用、「聞くこと」における講義のノートテイキングという四つの研究を紹介した。

キーワード：文章論、言語過程観、言語主体、時枝誠記、林四郎、

1. 時枝文章論の誕生

1.1 時枝誠記の言語過程観

日本の文章論の歴史は古い。日本語の研究者として言語にたいする特異な捉え方をした時枝誠記(1900～1967年)という研究者がおり、戦後の日本語研究史に大きな影響力を持ったからである。言語にたいする特異な捉え方というのは、言語を記号という「もの」ではなく、行為という「こと」として捉える見方のことである。時枝が活躍した当時の学界で影響力を有していた考え方は、スイスの言語学者・記号学者であるフェルディナン・ド・ソシュールのものであったが、時枝はソシュールの言語観を構成的言語観に基づくものとして退け、言語過程観¹を提唱したのであった。

言語過程観において、時枝は言語を「思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体である」²(時枝1941:序5)と定義し、表現だけでなく、理解という面からも「具体的な言語経験は、音声によって意味を思い浮べた時に成立し、文字によって思想を理解した即座に成立するのであるから、言語は実にこの様な主体的な活動自体であり、言語研究の如実にして具体的な対象は実にこの主体的活動自体であるといつてよ

¹ 一般的には「言語過程説」と呼ばれる。

² 引用にさいして旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めている。以下同様。

い」(時枝 1941:12)と定義づけた。このように、言語というものを、言語主体が音声・文字によって行う主体的な表現・理解活動それ自体として捉えることで、音声・文字の持つ線条的な性格を考慮し、表現・理解活動の過程から捉えた独創的な言語研究を試みたのであった。言語過程観と呼ばれるゆえんである。

言語を思想の表現過程および理解過程そのものとする時枝の見方(時枝 1950:15)は、文章を研究の対象としたとき、もっとも明確になる。「言語的表現の特質は、これを音楽的表現、絵画的表現、彫刻的表現などと対比することによって、よくその特質を把握することが出来る。云うまでもなく、言語は、それが時間的に流動展開することにおいて、著しく音楽的表現に類似し、絵画、彫刻などと相違する。このことは、文の表現においても同様であるが、とくに文章表現において著しく目につくことである。この時間的な流動展開と云うことが、文章の性質を規定する重要な点であるにも拘わらず、従来文章研究において、ややもすれば看過されていたことである。」(時枝 1950:244)という指摘のとおりである。つまり、言語というものは、一目で全体を捉えられる絵画や彫刻のような構造を持つものと考えてはならず、時間の経過とともに次々に形を変えて徐々にその構造が捉えられる音楽のようなものとする必要があるとするのである。

1.2 文章論の提唱

そのような思考過程の帰結として、時枝(1950)において、質的統一体としての性格を有する文法論の単位として、従来の「語」と「文」にくわえて「文章」を措定した。音楽のように時間とともに次々に形を変えて展開する線条的な性格を持つものとして言語を捉えた結果、「語」や「文」といった小さな構造体内部の記号の組み合わせを扱ってきた従来の言語研究の呪縛から解き放たれ、「文章」という新たな構造体を対象とする文章論という学問が誕生する素地が生まれることになったのである。同時に、文章の構造を、絵画や彫刻のような一目でわかる静的な構造としてではなく、音楽のように時間とともに流動展開する動的な構造として研究する視座が与えられることにもつながった。

こうした言語観は、現代的にはかならずしも特異な言語観ではない。たとえば、脳内の言語活動を扱う認知心理学は類似の考え方に立つと考えられる。言語処理(Language Processing)の処理(Processing)という術語が象徴的に表しているように、そこには過程(Process)という概念が含まれている。言語学は一義的には記号の学であろうが、言語がコミュニケーションの道具であり、そこに意味が含まれているという観点に立てば、記号を媒介とした心理活動の学、すなわち心理学への接近を見せるわけである。宮地(2003:27)が、「では、文章構造の生む世界はどんな世界かと問われれば、それはすぐれて『意味』の世界だと私は思う。言語の中核は意味なのであり、語・文・文章などのすべての単位体について、その中核は意味だと言っていいと考えるが、文章構造の生む世界は『すぐれて意味の世界だ』と思う」と指摘しているとおりに、言語というものを記号ではなく、記号を媒介とした意味のやりとりとして考えた先に言語過程観が姿を現すことになる。しかし、それを戦後のきわめ

て早い時期に言語学の文脈のなかで提示したことにより、言語過程観は後の言語研究者に大きな影響を与え、文章論という新たな分野の成立に寄与することになったのである。

2. これまでの文章論—時枝文章論の展開

国語学会の中心的学術雑誌『国語学』³が創刊されたのは1948年であり、そこでは日本語学の各分野を展望する展望号が数年ごとに発行されている。文章論という分野が初めて独立の項目として登場したのは、1962年刊行の『国語学』第49集であり、阪倉(1962)が「文体・文章」として執筆している。その10年後となる1972年刊行の『国語学』第89集では市川(1972)が「文章・文体」とし、文章をその中心に据えて執筆するようになる。このように、10年刻みで文章論をめぐる大きなうねりが感じ取れるため、以降の記述では10年を単位として文章論の展開を見ていくことにする。

文章論は既述のとおり1950年の時枝誠記の提唱により出発したものであるが、1950年代は、文章に関わる新たな試みが行われた「創生期」と見ることが可能である。ただし、この時代の文章論は、文章というものにたいする定義も学術的アプローチもまちまちで、試行錯誤の段階にあったと言えるだろう。1950年代も終わるところになると、市川(1959)のような整理や永野(1959)のようなまとまった著作が現れるようになり、文章論が「文章をめぐる雑多な議論」から「文章をめぐる学術的方法論」へと徐々に形を整えるようになる。

1960年代に入ると、文章論という学術分野に共通認識ができ始め、学界でもその存在が認知され始める「成長期」に入る。文章論の提唱者である時枝の著作(時枝1960)の登場によって脚光を浴びた文章論は、この60年代に学としての体裁を整えていくわけである。まとまった著作はまだ少ないが、1960年の雑誌『国文学』の特集「文章論の総合探求」(時枝ほか1960)を皮切りに、森岡ほか編(1963)などの現代語講座、森岡ほか編(1968)などの作文講座、さらには『月刊文法』の特集(永野ほか1969)のように、特集が組まれたり当時盛んに刊行された日本語関連講座のシリーズのなかで研究成果が発表されたりすることが多く、研究の蓄積が進んでいく様子が垣間見える。

1960年代の蓄積が開花する1970年代は、文章論の研究成果の発信がもっとも生産的だった時代である。日本語学の学術分野のなかに文章論という一分野が完全に定着し、多様な研究が発信される「発展期」を迎えた。発表形態は学術雑誌や講座物に掲載される学術論文が主であったが、まとまった著作として、永野(1972)、土部(1973)、林(1973)、市川(1978)が見られるようになった。こうした著作はいずれも時枝文章論の影響を大なり小なり受けたものであり、とくに市川(1978)は文章論の代表的文献として現在でも頻繁に引用されつづけている。

1980年代に入り、まとまった研究成果が専門書としてまとめられる「円熟期」に至る。

³ 現在は日本語学会の『日本語の研究』となっている。

1970年代に発表された論文が体系化され、1冊の書籍としてまとめられ、相次いで刊行されていった。相原(1984)、長田(1984)、永野(1986)、永野編(1986)、安達(1987)、金岡(1989)、佐久間編(1989)などがそれに該当し、こうした著作も時枝文章論の影響を感じさせる。一方、1970年代から海外の研究の影響も見られるようになってきていたが、1980年代に入り、そうした研究の発信が本格化し、池上(1983)やベケシュ(1987)などが注目を集めた時期でもあった。

続く1990年代も、とくにその前半までは、1980年代の勢いを継続していた印象がある。この時代は寺村ほか編(1990)という文章論の教科書が編まれたほか、佐藤編(1991)、西田(1992)、森田(1993)、長田(1995)、林(1998)といった個性ある文章論の書籍が出版された。しかし、90年代も後半に入ると、文章論も60年代から80年代にかけての熱気は失われたため、1990年代を「停滞期」と位置づけることにする。

2000年代に入ると、時枝文章論の影響力が薄れ、新たな世代が文章論に取り組む「転換期」に入る。そのことは、従来の文章論に相当する研究がなされていても、文章論とはあえて呼ばず、異なる名称で呼ばれることからわかる。とくに、文章はテキスト⁴(text)と呼ばれることが増え、文章分析を行う研究者も自己の専門領域を、日本発の「文章論」ではなく、海外発の「テキスト論」、あるいは「談話分析」と自称することが増えてきた。もちろん、文章論の伝統の継承を重視する佐久間編(2003)のような著作もあるが、2000年代を代表する著作である野村(2000)、庵(2007)、高崎・立川・新屋(2007)には「テキスト／テキスト」が、砂川(2005)には「談話」が、甲田(2001)にはその両方がタイトルにそれぞれ用いられている。

2010年代⁵に入ると、研究がますます多様化の様相を見せる。言語コーパスの整備も進み、文章論をめぐる再構築の試みが行われ、「多角期」の局面に移行したと見なせるだろう。この2010年代の傾向は三つある。第一は、ジャンルやテキストタイプに関わる研究の増加である。接続詞「だから」を中心に文章と会話の接点を探った萩原(2012)、講義と新書の談話展開構造を接続詞や「のだ」に着目して比較した宮澤(2014)、受身構文とジャンルの関わりを検討した志波(2015)、小説における指示語の機能を考察した張(2015)、リード文から見たニュースの談話構造を扱った井上(2021)などが並び、いずれも興味深い。

第二は、コーパス言語学隆盛のなかで向上した自然言語処理の技術を生かした研究の急速な進展である(李編2017)。それはとくに語彙の出現傾向とテキストとの関連を論じた研究の増加に顕著であり、鯨井(2015)、山崎(2017)、高崎(2021)などが挙げられる。

第三は、第二言語習得や対照修辞学などの非母語話者の文章を対象にした研究の増加である。たとえば、中国語話者の研究としては董(2021)や前川(2021)など、韓国語話者の研究としては朴(2011)や青木(2018)などがある。また、国語教育や日本語教育に役立

⁴ 「テキスト」と呼ばれることもある。

⁵ 便宜上、2010年代には2010年から2022年現在までを入れている。

てることを企図した立川（2011）や村岡（2014）などの研究もある。

表 1 日本の文章論の変遷

年代	段階	内容	
1950年代	創生期	文章論確立のための 試行錯誤の段階	時枝（1950）、市川（1959）、永野（1959）
1960年代	成長期	文章論形成のための 知見蓄積の段階	時枝（1960）、時枝ほか（1960）、森岡ほか編 （1963）、森岡ほか編（1968）、永野ほか（1969）
1970年代	発展期	文章論の成果発信が 精力的な段階	永野（1972）、土部（1973）、林（1973）、市川（1978）
1980年代	円熟期	文章論のまとまった 成果発信の段階	相原（1984）、長田（1984）、永野（1986）、永野編 （1986）、安達（1987）、金岡（1989）、佐久間まゆみ 編（1989）、池上（1983）、ベケシュ（1987）、林 （1998）
1990年代	停滞期	文章論の成果発信が 一段落した段階	寺村ほか編（1990）、佐藤編（1991）、西田（1992）、 森田（1993）、長田（1995）
2000年代	転換期	世代交代と観点の多 様化が進んだ段階	野村（2000）、甲田（2001）、佐久間編（2003）、 砂川（2005）、庵（2007）、高崎・立川・新屋（2007）
2010年代	多角期	ジャンル・コーパス・ 教育と関わる段階	立川（2011）、朴（2011）、萩原（2012）、宮澤 （2014）、村岡（2014）、鯨井（2015）、志波（2015）、 張（2015）、山崎（2017）、李編（2017）、青木 （2018）、井上（2021）、高崎（2021）、董（2021）、 前川（2021）

上掲の表 1 に示したように、時枝誠記が提唱した文章論を起点とし、日本の文章論の歴史を概観してきた。以降では、時枝文章論の展開について、直前直後の文連続の接続関係を議論する「接続論」、段落のまとまりを議論する「段落論」、文章の全体構成を議論する「文章構成論」の三つの下位分野に分けて掘り下げることにしたい。

3. 接続論の展開

文を単位として文章論を考える場合、局所的な観点から見ると、連続する 2 文がどのような関係をなしているかを検討するアプローチがまず考えられる。連続する前後の文の意味的な関係は接続関係と呼ばれ、典型的には「しかし」「そして」などの接続詞によって表示される。このため、接続詞の用法の分類と結びつけて接続関係の基本類型を示すのが、当初の文章論の中心的課題の一つであった。

伝統的にもっともよく用いられてきたのが市川(1978)であり、文間の接続関係の基本的な分類として「順接型・逆接型」からなる「論理的結合関係」、「添加型・対比型・転換型」からなる「多角的連続関係」、「同列型・補足型・連鎖型」からなる「拡充的合成関係」の8種3類に整理している。そのほか、田中(1984)、永野(1986)、佐治(1987)、佐久間(2002)、日本語記述文法研究会編(2009)、石黒(2016)なども接続詞の分類でよく参照されている。ただし、ここで気をつけておかなければならないのは、接続論はあくまで前後の文脈の意味的關係を扱うものであって、すべて接続詞で表されるわけではなく、むしろ接続詞で表されないほうが割合としては高いということである(石黒ほか2009a)。その意味で、接続論で扱う意味關係のほうが広いという点に注意する必要がある。

一方、接続詞の場合、前後の連続する2文の意味關係を表すとはかぎらない。接続詞が結んでいるのは1文の意味ではなく文脈であり、数文どうし、長い場合は段落どうしを接続詞が結びつけることもあるからである。接続詞が結びつける文脈の接続範囲のことを機能領域と呼ぶが、接続論における接続類型の整理が一段落した現在、接続詞が前後の文脈をどう結びつけるかという論理關係を問う研究から、何を結びつけるかという機能領域を問う研究に接続論の焦点が移りつつあるわけである。塚原(1970)、石黒ほか(2009b)、井伊(2020)などがそうした接続詞の機能領域を扱ったものである。

また、接続詞をより広い視野で見ること、「～～。しかし……。そこで――。」のように複数の接続詞を組み合わせて文章を展開させ、これが文章の全体構成に関わることもある。こうした興味深い現象を扱ったものとして村岡ほか(2004)、王(2015)が挙げられる。また、「だがしかし」のように接続詞を連ねて特殊な効果を持たせる接続詞の二重使用の研究も、馬場(2003)、石黒(2005)などで試みられている。このように、接続詞の直前直後の意味關係にとらわれず、接続詞のより広い機能に着眼することで、接続論を超えた現象を扱うことが可能になる。こうした接続詞の研究を概観したい向きは、日本の過去の接続詞研究を網羅した馬場(2010)を参照されたい。

ここまで見てきたように、接続論は、接続詞に見られる前後の論理的な意味關係を扱うものが中心であった。しかし、接続論の対象を Halliday & Hassan (1976)の結束性に相当するものと考え、ここまで見てきた「接続 (conjunction)」に加え、「指示 (reference)」「代用 (substitution)」「省略 (ellipsis)」「語彙的結束性 (lexical cohesion)」なども扱うことが可能になる。事実、佐久間(2002)や馬場(2006)では、狭義の接続論に留まらず、結束性に相当する現象を幅広く扱っている。

指示語「こ」「そ」による文脈指示や代用の研究の代表的な研究としては、庵(2007)が挙げられる。庵(2007)は「こ」と「そ」の文脈指示用法の使い分けを中心に論じたもので、また「あ」については文脈指示用法がないという指摘も見られる。その庵(2007)の前提となった「持ち込み詞」という独自の概念を用いた研究に長田(1984)が、代用について論じた研究に林(1983)がある。また、省略では久野(1978)が著名であり、省略するためには省略された要素が復元可能であること、情報がより古く、重要度がより低いほうの要素が省略

できることなどの基本原則を示している。語彙的結束性については相対的に研究の進展が遅れていたが、近年、コーパスの構築と活用が盛んになったこともあり、鯨井 (2015)、山崎 (2017)、高崎 (2021) などの有望な研究が次々に生まれるようになってきている。

接続、指示、代用、省略、語彙的結束性のみならず、連続する文の関係に影響を及ぼすものは存在する。永野 (1986) では、前後の文の関係を問題にする接続論にくわえ、文章全体にわたる文法カテゴリや主要語句の関係を問題にする連鎖論という分析観点を示したが、連鎖論まで視野を広げると、連続する文のつながりに多様な要素が影響していることが見えてくる。たとえば、テンス・アスペクトにおいては、工藤 (1995) が「～している」の使用・非使用が出来事間の時間的順序性に影響を及ぼしていることをタクシスという概念をもちいて説明し、清水 (2010) が論文の引用のさいに使われる「している」の機能の特殊性を定量的に論証している。また、モダリティに関わる叙述においては、野田 (1989) や林 (1990) が指摘するように、前後の文脈や文章の枠組みに従属することでモダリティ的な内容を満たす文が存在することを明らかにしている。「は」と「が」の使い分けにおいても、メイナード (1997) が物語文の両者の使い分けをステージングという概念を用いて説明し、砂川 (2005) が「～は…だ」「～が…だ」による主題の導入を焦点という観点で検討し、後続の文脈展開に及ぼす影響について考察している。

このように、ある文法カテゴリの選択は 1 文のなかだけで完結するものではなく、文章という環境のなかに置いて検討して初めてそうした現象の本質が見えてくることがある。1 文のなかに収まらないこうした現象の存在に気づくのは文法研究者に多く、そうした発見をきっかけに文章論に接近する文法研究者の存在によって文章論の研究成果は一層豊かになっているように感じられる。

4. 段落論の展開

国語教育の世界には、形式段落と意味段落という区別がある。段落は一義的には改行一字下げで表される構造体であり、これを形式段落と呼ぶのにたいし、意味段落は内容上のまとまりであり、改行一字下げという形式を持っていない。国語教育で意味段落が想定される背景には、内容上のまとまりを考えるさいに意味段落に分けるという作業をさせると子どもたちが文章の構造を意識化できるからであり、そのさい形式段落との切れ目のずれが生じるからであると思われる。しかし、意味段落という内容上のまとまりを形式段落と区別して段落と呼べるのかについて、永野賢と市川孝という文章論を牽引してきた二人の研究者のあいだに論争があった。

形式段落しか認めない永野 (1986:94-95) は、形式段落は、形式上そこで段落に分けられている以上、そこに分けられているだけの意味はあるわけで、形式上の区分を出発点にすべきだという筋の通った主張を行う。

「段落」に関して、「形式段落」と「意味段落」という区別をすることがある。主として国語教育の立場からであるが、これらの術語を使うことを、私は適当でないと思う。{中略} ここで問題になるのは、形の上での切れめ——改行——の箇所が、意味段落という考え方のために、無視（または軽視）される傾きがあるということである。そして、それは形式段落とか意味段落とかいう名称が示すように、「形式にすぎないもの」よりも「意味にもとづくもの」を重んずるという考え方に根ざすわけである。ここに問題がある。{中略} いわゆる形式段落は、単なる形式ではない。切れめとして改行されるからには、改行されるだけの内容（意味）上の理由があるはずである。なんらかの意味の切れめとして改行になっているわけである。

一方、市川（1978:126）は、形式段落と意味段落がずれることがあるため、両者を明確に区別するという現実的な主張を行っている。

実際には、内容上の統一と、形式上の改行とが合致していない文章が少なくないので、さまざまな文章を広く考察の対象とする場合には、内容上の統一という面に重点を置いて考える必要がある。この場合、とくに「文段」という用語を用いて、「文段とは、一般に、文章の内部の文集合（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である。」というように規定することができる。

たしかに、段落分けのあった文章から段落分けをなくして示し、この文章を段落分けしてくださいという課題をさせた場合、日本語の文章ではもとの文章と一致することはなかなかない。佐久間（1979）によれば、新聞の社説の段落分けの実験において、アメリカ人のインフォーマント 161 人中 37 人が『ニューヨーク・タイムズ』の社説の原文とまったく同じ段落区分をしたのにたいし、日本人のインフォーマント 97 人は 1 人も『朝日新聞』の社説の原文と同じ段落区分をしたものはいなかったという。

その後、佐久間（2003）は、意味段落のことを「文段」と読んで区別した市川（1978）の考え方を発展させ、書き言葉の文章における「文段」にくわえ、話し言葉の談話における「話段」という概念を導入し、「文段」と「話段」を合わせて「段」と呼んでいる。つまり、形式段落は「段落」、意味段落は「段」として両者の区別を厳密にしたのである。

形式段落と意味段落のずれについては、それを積極的に捉える塚原（1966a）の次のような主張もある。

筆者の創作意図と文章の論理構造と、——両者の立脚する基盤に、理論的な相違がある。そこで、文章構造の論理的な展開として設定される段落を、論理的段落と名づけ、文章形成の実際的な定着として設定された段落を、修辭的段落と呼ぼう。

塚原（1966a）は、文章の論理構造に基づく文段を「論理的段落」に、筆者の創作意図に基づく段落を「修辭的段落」に分ける。つまり、意味段落と形式段落のずれを書き手のレトリックと理解し、意味段落とずれる形式段落に積極的な意義を認めようとしているわけである。形式段落の意味段落からのずれを書き手の力量不足とするか、反対に、書き手の優れた力量とするかでは、同じずれでも捉え方に大きな違いがあることがわかる。

なお、塚原（1966b）には「基本段落」と「段落連合」という興味深い考え方も示されている。段落の「基本単位」は文であるとし、「基本段落」が複数連合して「段落連合」を形成し、形式上の段落となり、最大の「段落連合」が文章になると考える。つまり、一つの文は一つの段落を形成するのが基本と考えるわけである。この塚原（1966b）の段落観は、一つひとつの文の働きを重視する林（1998）の段落観に近い。林（1998）は、文章を理解するプロセスで、隣接する複数の文が相互に密接な関係を作り、文脈のなかで融合して一文になっていく現象を「文塊」と呼び、「文間に起こる雪だるま現象」（林 1998:206）と規定する。小さな雪玉が雪のうえを転がるうちに周りの雪を次々に集めて大きな雪だるまになるように、文章を読みすすめるなかで核となる文が似たような内容を次々に吸収して大きな意味の塊になっていくさまを指したものであり、段落が先にあるのではなく、複数の文が積み重なって一つの段落を形成すると考えるのである。

中国の段落をめぐる議論にも長い歴史があり、たとえば「自然段」「意義段」のような区別も存在するが、日本の段落論においてもこのような多様な議論が存在する。日本の段落論を概観したい向きは石黒（2020）を参照されたい。

5. 文章構成論の展開

日本語における文章構成論の歴史は古く、五十嵐（1905）に遡る。五十嵐（1905）は西洋の修辭学をモデルにしつつ、日本語の文章に合うように改変して体系化を図ったもので、当時の作文教育に大きな影響力を持ったとされる。五十嵐（1905）は文章構成を「頭括式」「尾括式」「両括式」「追歩式」「散列式」という五つに分類しているが、そのうちの「頭括式」「尾括式」「両括式」は、文章の内容をまとめる統括がどこにあるか、すなわち文章の冒頭か末尾かその両方かによって分類したものである。戦後の文章論においても五十嵐（1905）の統括という概念は引き継がれている。

たとえば、市川（1978）では「文章の全体構成」において、全体を統括する段落を持つもの（統括型）と持たないもの（非統括型）に分け、前者の統括型をさらに「冒頭で統括するもの（頭括式）」「結尾で統括するもの（尾括式）」「冒頭と結尾で統括するもの（双括式）」「中ほどで統括するもの（中括式）」の四つに分ける2類5種に分類されている。

また、永野（1986）は、文法論的文章論の基本的な枠組みとして「接続論」「連鎖論」「統括論」の三つを立てており、そのうちの「統括論」において文章のなかの特定の文が文章全体を統括すると考え、その文が文章中のどの位置を占めるかによって「冒頭統括」「末尾統括」

「冒頭末尾統括」「中間統括」「零記号統括」の5種に分類しており、市川（1978）に近い分類となっている。

さらに、佐久間（1999）は要約文の調査から得られた研究成果をベースにしている点に特徴があり、市川（1978）や永野（1986）の5種に、文章の2か所以上に複数の統括⁶が分散する「分括型」を加え、「頭括型」「尾括型」「両括型」「中括型」「分括型」「潜括型」の6種を文章型としている。

なお、塚原（1966b）や土部（1973）にも、統括あるいはそれに準ずる機能を意識した文章構成の分類が見られる。

近年の文章構成論においては、学習者の作文を扱った青木（2018）、新書と講義という複数のジャンルを扱った宮澤（2014）、ニュースにおけるリード文の機能を論じた井上（2021）などがあるが、いずれも上述の文章構成論の影響を受けている。

一方、統括という抽象度の高いモデルだけでなく、文章のジャンルを絞ってより具体的なモデルを模索する研究も見られるようになってきている。たとえば、ムーブ分析というものがある（Swales 1990）。ムーブ分析は、学術論文をはじめとする専門的なジャンルの文章において、特定の目的や機能を有する論のまとまり（ムーブ：move）と、さらにそのなかに下位のまとまり（ステップ：step）があるものと捉え、ムーブとステップを用いて文章の分析を行う手法を指し、一定の成果を上げているが（大島（2009）、大島ほか（2010）など）、個々の文章の性質はジャンルによって異なるため、今後は個々のジャンルの文章構成を丹念に調べることでジャンルの異なる文章間にある種の共通性を見だし、文章一般に通用する法則を導いていくことが求められると思われる。

6. 林言語学による時枝文章論の再生

ここまで日本語の文章論の研究史を概観してきた。時枝（1941）で示された言語過程観に基づき、時枝（1950）で「語」や「文」と並んで言語研究の対象となった「文章」は、文章論という新たな研究分野を70年以上かけて育んできた。21世紀に入り、こうした出発点は忘れられつつあり、言語研究を取り巻く環境が変化した結果、文章論の内実はかなり多様化している。それ自体は歴史の必然であると思うが、時枝（1941）の言語過程観が意識されなくなった結果、もともと文章論が備えていた基本となる前提までもが置き忘れられているように感じられる。その前提とは、言語を記号という「もの」として捉えるのではなく、記号を媒介にした表現・理解行為という「こと」として捉えるという見方である。本稿は、言語過程観という言語行為観を文章分析の方法論として組みこむことで、文章論という専門領域がふたたびめざましい成果を上げ、脚光を浴びると考える。そうした考えを示すにあたり、林四郎という研究者の研究と、その背後にあった卓越した言語観を紹介したい。

⁶ 佐久間（1999）に従えば「統括」は「中心段」という表現になる。

林四郎（1922～2022年）は筑波大学名誉教授・国立国語研究所名誉所員であり、東京大学在学中に時枝誠記の指導を受けた言語研究者である。北京日本学研究中心でも1985～1988年に主任教授を務めており、中国ともなじみが深い。文章論の研究者と言っても支障はないが、臨時一語の構造（林1982）のような語彙研究者、基本文型の研究（林1960）のような文法研究者としても著名であり、多方面にわたり活躍した言語研究者である。

文章論の主著としては、筑波大学に提出された博士学位論文でもある『文の姿勢の研究』（林1973）がある。林(1973)は文章を、認識のかたまりを作り、それを他のかたまりと関係づけ拡張していく思考活動であると捉え、そこに二つの相反する力が働いていると考える。それは、つながろうとする力と離れようとする力であり、前者を「流れ」、後者を「構え」と呼ぶ（林1973:15-18）。そして、その流れと構えという観点から、文章のなかでの文の呼応を問題にする起こし文型を始発型・承前型・転換型の三つに分け、さらにそれぞれについて、固定した形態的指標を持つ「記号（symbol）」と、明確な形態的指標が指摘しにくい、内に隠れた条件を持つ「要素（agent）」に分ける。その結果、「始発記号／始発要素」「承前記号／承前要素」「転換記号／転換要素」の六つに分類され、始発型・承前型・転換型のいずれにも当てはまらない「自由型」の計七つを用いて、小学2年生の国語教科書に出てきた1025文すべてについて分類を行っている。

林(1973)の学史上の価値は、庵(1999:6)が指摘するように、Halliday & Hasan(1976)に先んじて日本語の文章を構成する表現を網羅しそれに考察を加えたこと、接続詞や指示語のように語の文法的性質として文をつなぐ力を持つ「記号（symbol）」にくわえ、反復のようにその解釈を文章内の他の部分に依存することで文につながりをもたらす「要素（agent）」を指摘したことの二つがまず挙げられるだろう。しかし、本稿では、時枝（1941）が示した言語観を忠実かつ発展的に受け継ぎ、独自の言語観を確立したという点に最大の功績を求めたい。

林(1973)をはじめとする一連の著作に示された独自の言語観に基づく言語研究を、庵ほか（2017）にならって「林言語学」と称するが、林言語学の最大の特徴は言語主体の立場に立って言語分析を行うところにある。言語によってコミュニケーションが成立するとき、その背後にはかならず発信者である表現主体と受信者である理解主体が存在する。表現主体と理解主体を合わせて言語主体と呼ぶ。一方、言語研究を行う場合、研究者は可能なかぎり客観的に分析しようとするため、表現主体・理解主体といった言語主体の立場からは離れ、その場の時間や空間とは無関係に言語現象を観察する観察者という第三者の立場に立つことが多い。言語を記号という「もの」として捉える研究者の場合、とくに観察者の立場を取る傾向が強い。一方、言語を記号という「もの」を媒介とした表現・理解行為という「こと」として捉える研究者の場合、あえて言語主体の立場に立って研究を行うことになる。これが時枝文章論の言語過程観であり、それを実際の言語分析として形にしたのが林（1973）の「文の姿勢」をはじめとする林言語学の一連の研究である。

言語主体の立場に立ち、言語の行為的側面を問題にする林言語学のスタンスを言語分析

の方法論に生かす場合、何が重要になるだろうか。それは、「時間の流れの中で文章の組み立てを考える」という考え方である。

林(1973)の「文の姿勢」の研究は、林(1960)の「基本文型」の研究をベースにしている。「基本文型」は、言語が時間の流れの中で組み立てられていく過程を重視し、言い始めるときの姿勢、言い終わりまでを見通した姿勢、言い終わるときの姿勢の三つの段階を想定し、その三つ段階それぞれに「起こし文型」「運び文型」「結び文型」を設定している。そして、それまでの内容を承けて、次にどのように話を始めるかを表す文型である「起こし文型」について、小学2年生の国語教科書に出てきたすべての文にたいして分類したものが林(1973)の「文の姿勢」の研究なのである。

ここで注意したいことは、林(1973)が文から離れて文章の全体構成を想定していない点である。林言語学の特徴は、文と文章の一体化であり、むしろ1文1文のなかに文章を見ていることに注意を払いたい。そのことは林(1998)にわかりやすく書かれている。

まず、文と文章を分けるのは、話の混乱を避けるためには大変いいことだが、その違いは、あくまでも形の上だけのことで、本質の違いではないと、私は考える。文は、文章の実現体の一部であることを確認したい。一つの文が作られた時は、もう文章が実現し始めているのだ。時には、その1文で完成してしまう文章もある。大抵は、それは、まだ最初のひと鍬で、前途三千里の思いに満ちた1文ではあるが、既に文章中に細胞として生き始めた1文である。そこから次々にできて行く文章中の文には、どの文にも、多かれ少なかれ、自分が全文章の代表だという意味がこもっている。どの文も、述べ終わった文脈を包み込んで、その先端に自分がいるという位置感覚を持つとともに、これから叙述が進んで行く方向へ顔を向けた姿勢を持っているはずだ。その意味で、文章中の文は、それも、既述文脈から未述文脈への渡りの姿勢を持っていると言える。文は、思考の流れの中で、さらに新たに流れを作る働きをするものだ。文は、それ自身が文章なのである。

文章を一つの生き物だとすると、その特徴は、どこを切っても、そこに必ず、文という生き物がいるということである。{中略}だから、文と文章とは、同じ命を命として持っている共同生命体なのである。であれば、文がそれ自身文章だと言えるとともに、文章は、また、それ自身が文だとも言えるのである。事実、私たちが文章を作るとき、実際にしていることは、常に、文を作ることであって、それ以外の現実活動は、していない。(林1998:10)

林(1990)が提唱している「文章論的文論」という捉え方もこれと軌を一にする。誤解を恐れずに言えば、「文章のなかに文がある」という一般的な捉え方を排し、「文のなかに文章を見る」という捉え方をするのである。林言語学では、語、文、文章をそれぞれ独立した単位

と捉えてはおらず、書き手の頭のなかにある思想を文という形に変えていく行為⁷に語を見だし、また、文章を見いだすのである。

また、行為としての言語を記述するときに林（1973）が「始発記号／始発要素」「承前記号／承前要素」「転換記号／転換要素」「自由型」という七つの分類を軸に、国語教科書に出てくるすべての文を数えあげ、分類している点も興味深い。こうしたアプローチは、必要なアノテーションを付して統計的に分析するというコーパス言語学の考え方に通底し、コーパス言語学の出現を予見していたかのようである。

言語主体の立場に立ち、言語過程観に基づいて言語使用について論じることの重要性は、言語研究者として指摘を受ければただちに理解できる。しかし、難しいのはそうした考え方をいかに形にするかである。時枝文章論は 1970 年代を中心に隆盛したものの、現在では影響力を失っているように見えるのは、文章論という専門領域が開拓しつくされてしまったからではない。文章論には解決されない課題はいまだに山積しているにもかかわらず、その課題にアプローチする方法の開発が困難で、立ち往生しているのである。

言語記号という「もの」を研究するのに比べ、言語行為という「こと」を研究する場合、言語行為という動的な対象を具体的な形にして把握することが難しい。そのため、言語行為という「こと」を研究するという強い自覚を持たないまま文章という対象と向きあうと、対象把握が容易な言語記号という「もの」を研究する構造研究に戻り、ありきたりの研究となって研究自体が行き詰まるという悪循環に陥るのである。時枝（1941）に端を発する文章論が行き詰まってしまったのは、言語行為という「こと」への意識が希薄化し、言語行為を対象化する方法論が見いだせなくなってしまったからにほかならない。したがって、現在、文章論に求められるのは、林（1973）に示された「文の姿勢」の研究をはじめとする林言語学を理念と方法を見直し、生かすことである。こうした温故知新の姿勢が、現代に生きる文章研究者に求められていることである。

そこで次節では、時枝文章論や林言語学が問いかける言語過程観をどのように文章分析としての形にするのか、現時点での本稿なりの方法論を紹介することをとおして、昨今の文章論に感じられる閉塞感を打破する可能性を探りたい。

7. 林言語学継承の試み

7.1 「読むこと」における林言語学継承の試み

林(1973)で示された「文の姿勢」の研究は、理解過程を重視した研究である。そのことは、「書きなおすについては、文章の読みということを大きな着眼点としたので、本書は全体に読解過程の研究でもある」（林 1973:2）という指摘からもわかる。

また、林(1973)は後続文のタイプの予測をも視野に入れている点に先見性がある（林

⁷ 林言語学ではその行為が言語そのものである。

1973:319-327)。時枝（1951）は国語教育において、作品の冒頭から出発してその展開をたどっていくたどり読みの重要性を語り、森田（1969:74）は「文章分析はあくまでたどり読みの過程としてなされるべきであり、文脈に逆行した読みはタブーとなる。あとの叙述を了解した結果、さかのぼってそこに文章構造上ある種の意味を認めるなどということは許されない。文脈の理解、構造分析は既に読み進んだ前の部分のみを意識の対象としなければいけないのである」と主張するが、予測までは視野に入れていない。しかし、「文の姿勢」に注目する林(1973)は、1文1文が先行する文脈の影響を受けて成立すると同時に、「文の姿勢」が後続する文脈に影響を及ぼすと見ているのである。

林(1973)の予測は、今読んで理解している文⁸の「起こし文型」から先行文脈との関係を考え、それを予測に転用するという方法を採用している。いわば後ろ向きのデータを逆転させて、前向きのデータとして利用し、確率論的に予測を探ろうとする試みである。後ろ向きのものを前向きにするというその発想の柔軟さや、このような早い時期に予測を視野に入れて研究を進めていたことに驚きを禁じえない。これも、林(1973)が理解主体の立場に立って、理解過程を重視して研究をおこなっていたことから来る帰結である。

これにたいし、石黒（2008）は予測を正面から扱った研究で、前向きのデータを前向きなままで用いた調査を行っている。具体的な方法としては、文章をたどり読む過程で複数の日本語母語話者に1文読むごとに予測をしてもらい、それがどの程度、原文と、またお互いに一致するかを調査し、当該文がどのような形態的指標を備えたどのような内容のときに、後続文脈にどのような文が来やすいかを明らかにしたものである。また、読み手に文章を読ませて予測をしてもらう方法だけでなく、言語コーパスを用いて、あるジャンルの文章における当該文がある形態的指標を含む場合、どのぐらいの割合で特定の接続関係を呼びこむかについての調査も併せて行っている。その結果、文章展開にはある種の型が存在し、読み手が文章を理解する場合、その型に従って理解を進めていることを明らかにしている。

石黒（2008）では、限られた時間で理解主体が繰り返し読みをせずに文章が理解できる背景には、理解主体の持つ予測能力があると考えている。予測能力が後続文脈のあいまいさを減らし、ありそうもない選択肢をあらかじめ削り、文章の展開する方向性を限定することで迅速な読み取りが可能になっているという前提に立ち、分析を行ったものである。

また、一口に予測といっても、その内実は多様である。石黒（2008）では、予測をその質的な相違から、

- ①文章が続くか途切れるかを問題にする「関係連続の予測」
- ②文章が続くことを前提に当該文と後続文の関係の質を問う「接続関係の予測」
- ③当該文と後続文の関係に加え、後続文の内容まで予測できる「具体的内容の予測」

の三つに分けることを提案しており、とくに②の「接続関係の予測」が文章展開の型ととし

⁸ 以降、今読んで理解している文を「当該文」と呼ぶ。

て文章理解のさいに重要な役割を果たすことを示している⁹。

なお、石黒（2008）に先立つ予測の調査として平田（1997）があり¹⁰、そこでは日本語学習者の日本語能力が上がるにつれて予測能力が日本母語話者に近づいていく様子が報告されている。このように、日本語母語話者や日本語学習者の予測能力を調査することが、文章理解の過程を明らかにする文章論らしい研究の一つになることを強調しておきたい。

7.2 「書くこと」における林言語学継承の試み

文章という書いたものは問題にされても、書くという行為は問題にされにくい。というのは、たとえば日本語学習者に作文を書いてもらったとき、教師が読んで添削をするのは、できあがった作文、いわばプロダクト（産出結果）としての作文であって、プロセス（産出過程）としての作文ではないからである。

もちろん、プロセス（産出過程）としての作文の実態を知りたければ、学習者が作文を執筆する様子をビデオカメラで撮影し、分析すればよいわけだが、学生の執筆する作文紙面を撮影するカメラと、執筆中の学生の手元を撮影するビデオカメラが必要になる。長時間にわたるビデオカメラの撮影は、撮影する研究者、撮影される学習者の双方にとって負担であり、分析の労力も少なくない。

さいわい、作文自体は近年パソコンによって作成されるのが一般的であるため、パソコンに日本語を入力するキーストロークが記録できるシステムがあれば、執筆の過程を知ることができる環境が整いつつある。

埼玉大学の金井勇人氏を研究代表者として制作された『JCK 作文コーパス』という学習者コーパスがある（金井 2016）。『JCK 作文コーパス』は、比較的長い文章に表れる文章構造や接続詞・指示語などの用法を分析することを目的に作られたコーパスで、中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者各 20 名が執筆した 2000 字程度の作文（説明文、意見文、歴史文の 3 ジャンル）が収録されている。これらの作文はパソコンのブラウザ上のシステムに入力する形で執筆された。このシステムは、入力の過程で Enter キー、Backspace キー、Delete キーを押したり、切り取りや貼り付けの操作を行ったりする¹¹と、その時点でシステム上に入力されている文字列が記録されるように琉球大学の新城直樹氏が設計した。その

⁹ 「接続関係の予測」が文章理解のさいに重要な役割を果たすのはある意味で当然である。①「関係連続の予測」は文章が一貫した内容を表すものである以上、基本的に成立するものである一方、③「具体的内容の予測」は続きがわかっている場合はその文章を読む意味が失われるので、例外的な場合を除き、成立しないのが普通だからである。

¹⁰ 予測研究において林（1973）が言及されることは少なく、寺村（1987）が予測研究の初めての試みとして言及されることが多い。平田（1997）も寺村（1987）を参考にしたものである。

¹¹ 切り取りや貼り付けについては、執筆者がシステムに入力した文字列を切り取って、文章中の別の場所に貼り付けることはできるが、外部の web サイトなどの文字列を貼り付けることはできないようになっている。

結果、学習者が執筆過程でさまざまな行動をすることがわかった。なかには、自分の作文を最初に中国語に書き、それを逐一日本語に翻訳していく学習者もいた。プロダクト（産出結果）だけ見てはけっしてわからない現象がプロセス（産出過程）を見ることで明らかになったのである。

なかでも興味深かったのが修正過程である。修正過程を観察すると、修正前の表現と修正後の表現を比較することができ、執筆者である学習者が何を意図してどう修正しようとしたかのおおよその見当がつく。田中・石黒（2018）は、母語話者と学習者の作文執筆修正過程における修正の位置と種類を分析したものであるが、中国人学習者は、入力中の文の先頭部を中心に、局所的な修正をしながら執筆する傾向があるのにたいし、韓国人学習者は、作文をある程度書き進めてから、書き終わった段落を中心に大局的な修正をまとめてする傾向があることがわかった。母語話者はその中間で、入力中の先頭部だけでなく、その先頭部を含む文やその前の文を考慮に入れながら修正を行う傾向があった。一方、布施・石黒（2018）は、母語話者と学習者の作文執筆修正過程における自己修正の動機を分析したものであるが、中国人学習者は、入力操作や文法の間違いを直すために局所的な表現に着目して修正する傾向にあるのにたいし、韓国人学習者は、既出の表現を豊かにすることを重視すると同時に、文章の全体構成に意識を向けて修正する傾向があることがわかった。母語話者は、適切な表現の選定に重きを置き、文章全体の展開も見据えた戦略的な修正を行っていた。

2022年現在、国立国語研究所では中国国内の7大学と協力し、「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」というプロジェクトを実施しており、そこではそうした執筆プロセスをより精密に記録できる **EssayLogger** という入力支援システムを開発して調査を行っている。特徴としては、母語での入力画面やメモ欄を備えている点（図1を参照）と、文字を入力したさいのパソコンのキーストロークが時間も含めてすべて記録できるシステムとなっている（図2を参照）点の二つが挙げられる。将来的には一般に公開し、無料でダウンロードできるようにする予定である。

こうしたコンピュータの技術を駆使すれば、どこにいても、たとえコロナの流行時であっても、書き手の執筆プロセスを正確に把握できる時代になっている点が、林（1973）の時代と大きく異なる点であり、そうした工学的な技術を活用しない手はない。ほかにも、タブレットやスマホのディスプレイを動画として録画することも容易になっており、「打ち言葉」時代の文章産出過程の情報収集によってプロダクト（産出結果）ではなくプロセス（産出過程）を研究する環境はすでに十分に整っていると考えられ、今後新たな文章の分析方法の開発が期待される。



図1 EssayLogger の学習者入力画面

ID	分類	日付	時間	入力時間	操作力	操作内容1	操作内容2	操作内容3	操作内容4	テキスト	段落文字数	改行数	テキスト全文
33	L1essay	2022/9/4	23:40:35	0.22	key	キー入力	BackSpace	229	Backspace	9	9	0	0 在回忆的时候照片和
34	L1essay	2022/9/4	23:40:36	0.246	key	キー入力	KeyS	229	Process	10	10	0	0 在回忆的时候照片和
35	L1essay	2022/9/4	23:40:36	0.338	key	キー入力	KeyP	229	Process	10	10	0	0 在回忆的时候照片和
36	L1essay	2022/9/4	23:40:36	0.349	key	キー入力	変換確定	229	Space	11	11	0	0 在回忆的时候照片和视频
37	L1essay	2022/9/4	23:40:37	0.384	key	キー入力	KeyN	229	Process	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频
38	L1essay	2022/9/4	23:40:37	0.281	key	キー入力	KeyA	229	Process	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频
39	L1essay	2022/9/4	23:40:37	0.132	key	キー入力	KeyY	229	Process	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频
40	L1essay	2022/9/4	23:40:37	0.03	key	キー入力	KeyI	229	Process	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频
41	L1essay	2022/9/4	23:40:38	1.162	key	キー入力	KeyF	229	Process	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频
42	L1essay	2022/9/4	23:40:40	1.507	key	キー入力	変換確定	229	Digit3	14	14	0	0 在回忆的时候照片和视频哪一方
43	L1essay	2022/9/4	23:40:44	3.867	key	カーソルキー	カーソル前へ37		ArrowLeft	14	14	0	0 在回忆的时候照片和视频哪一方
44	L1essay	2022/9/4	23:40:44	0.393	key	カーソルキー	カーソル前へ37		ArrowLeft	14	14	0	0 在回忆的时候照片和视频哪一方
45	L1essay	2022/9/4	23:40:44	0.279	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	13	13	0	0 在回忆的时候照片和视频哪一方
46	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.509	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	12	12	0	0 在回忆的时候照片和视频哪一方
47	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.031	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	11	11	0	0 在回忆照片和视频哪一方
48	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.029	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	10	10	0	0 在回忆照片和视频哪一方
49	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.031	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	9	9	0	0 在照片和视频哪一方
50	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.047	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	8	8	0	0 照片和视频哪一方
51	L1essay	2022/9/4	23:40:45	0.084	key	キー入力	BackSpace	8	Backspace	8	8	0	0 照片和视频哪一方
52	L1essay	2022/9/4	23:40:46	1.351	key	カーソルキー	カーソル先へ39		ArrowRight	8	8	0	0 照片和视频哪一方

図2 EssayLogger のキーストローク記録データ（母語作文の例）

7.3 「話すこと」における林言語学継承の試み

文章論の扱う範囲は基本的には書き言葉であるが、言語産出や言語理解のプロセスを細かく調べるためには、話し言葉を観察することも重要になる。書き言葉の場合、先ほど紹介した EssayLogger のようなプロセスを記録できるシステムを使わないかぎり、執筆プロセスは消失してしまうが、話し言葉の場合、録音さえしておけば、言い誤り、言い直し、言い

よどみ、沈黙などが記録に残り、分析の対象にできるからである。そのため、ここでは「話す」という産出のプロセスに注目する。

近年、談話分析の研究が進み、言語対象として周辺の要素と考えられてきた応答詞やフィラーなどの感動詞が研究対象となっている（友定編（2015）、友定編（2022）など）。談話産出という観点で言えば、言語生成に関わるフィラーが、産出過程を重視する文章論の立場から見て重要になると思われる。現在研究途上ではあるが、日本語学習者のフィラーの習得過程はおおよそ次の表2のようになることがわかっている（石黒 2022）。なお、使用したデータは、北京外国語大学北京日本学研究中心、北京師範大学、国立国語研究所の三者が連携して収集に携わった B-JAS という学習者コーパスである。このコーパスは、I-JAS（多言語母語の日本語学習者横断コーパス）に準じて設計され、大学入学後ゼロから日本語を学び始めた 17 名¹²の日本語学科の学習者にたいして行った調査、半年に 1 回、計 8 回の縦断的なデータが収められている。石黒（2022）は、そのうちの 3 名について最終回を除く 7 回の調査データを用いている。

表 2 中国を母語とする日本語学科所属の日本語学習者のフィラー習得過程

調査時期	フィラーの産出傾向
1 年次前半	中国語のフィラーと沈黙が多い。
1 年次後半	中国語のフィラーと「あー」「んー」（中国語のフィラーに近い）が多い。
2 年次前半	中国語のフィラーも多いが、「あー」が急増する。
2 年次後半	中国語のフィラーが減少に転じ、「えーと」が急増する。
3 年次前半	中国語のフィラーが激減し、「なんか」が頻用されはじめる。
3 年次後半	「まあ」や「そのー」が人によって頻用されるようになる。
4 年次前半	多様なフィラーのバランスのよい使用が見られるようになる。

林言語学の根本をなす「基本文型」について、林（1960：40-41）は「心中の想が言語化されるに際して、想の流れに一応のまとまりをつけるために、支えとして採用される、語の並びの社会的慣習である」と規定する。フィラーは、心中の想を言語化するさいに表出されるメタ的な言語であると考えられ、表出されるフィラーは表現主体である話し手が何語で考えているかを如実に表す、いわば脳内の言語産出活動の実況中継である。その意味で、フィラーに注目することは、発話という表現行為そのものを対象化して研究することにほかならないと言える。

¹² うち、1 名のみ、1 年程度の学習経験がある。なお、3 年次にはほとんどの学生が日本に留学している。

7.4 「聞くこと」における林言語学継承の試み

「書くこと」「話すこと」という産出過程にくらべ、「読むこと」「聞くこと」という理解過程を調査することは難しい。産出過程の場合、産出という行為の結果として産出されたものが存在し、それを時間の流れのなかで記録すれば、産出過程を知ることが可能である。「書くこと」の場合、EssayLoggerのようなキーストロークを記録するシステムや、タブレットやスマホの操作画面を動画として録画するアプリを使えば、産出過程を分析することが可能になる。「話すこと」の場合でも、ICレコーダーやPCMレコーダーのような録音機材、ビデオカメラや360度カメラのような録画機材、VoovやZoomのようなオンライン会議システムの録画機能などを使えば、発話や、それに付随する動作・身振り・視線・表情などの情報を研究することが可能になっている。

これにたいし、「読むこと」「聞くこと」は頭のなかで起きている活動であり、通常、目で見たり耳で聞いたりできる形で対象化されることはないので、観察自体が難しく、「読むこと」「聞くこと」を可視化する工夫が必要になる。7.1の文章理解における予測で見たように、理解主体本人の内省、その内省を言葉にしてもらう発話プロトコルデータ、理解活動の対象となるコーパスデータなどを使うことで「読むこと」を可視化できることを示したが、「聞くこと」も工夫次第で可視化することはできる。

早稲田大学名誉教授の佐久間まゆみ氏が主催している研究会で長らく講義理解の研究を行っており、筆者もその研究会に参加している。研究の成果は佐久間編(2010)などにまとめられているが、その研究会の講義研究は、講義という談話そのものを研究だけでなく、講義という談話を聞いて理解する日本語学習者の理解を研究するという理解重視に特徴がある。理解データとしては、講義中に講義内容を記録した受講ノート、講義終了後に講義内容をまとめた要約文、および講義内容についてのインタビューの三つである。要約文、インタビューは結果的理解であるのに対し、受講ノートは過程的理解である。受講ノートをどの順番でどのように取るかによって理解プロセスを知ることができる。そうした研究を発展させた田中(2019)では、ノートテイキングのさいに受講者にデジタルペンを用いて記録させることによって理解プロセスをより正確に把握することに成功している。

このように、多様な機器の発達によって表現・理解のプロセスを多面的に把握できる環境が整ってきた今、行為としての言語の表現・理解のプロセスを対象として可視化する工夫が期待されている。

8. これからの文章論—林文章論の継承

以上、日本語研究における文章論の70余年の学史について振り返ってきた。時枝(1941)の言語過程観とそれに基づく時枝(1950)の提唱をきっかけに文章論は産声を上げた。「語」「文」にくわえて「文章」が研究の対象となることで文章論は戦後急速に発展し、接続論・段落論・文章構成論という3分野において60年代から80年代にかけて研究成果が多様な

花を咲かせた。なかでも異彩を放ったのが林(1973)を主著とする林言語学であり、庵(1999)が Halliday & Hasan (1976) と共通する観点を持ちつつもそれに先んじた「日本のテキスト言語学の嚆矢」と評価するように、卓越した言語観が生みだした文章論であった。

21 世紀に入り、文章論は多様化の時代を迎え、大学院で日本語学・日本語教育学を専攻する大学院生が増え、文章論に関連する数々の博士論文が発表されるようになった。それぞれの論文は粒ぞろいであり、最新の文献を幅広く渉猟した跡が伺えること自体は好ましいが、残念なことに、文章論という学問分野がテキスト論や談話分析に置き換わり、文章論がその創生期に備えていた

- ①言語を記号という「もの」ではなく、言語主体の行為という「こと」として捉える
- ②行為としての言語を時間軸に沿って刻々と変化する過程として見る
- ③観察者でなく、言語主体（表現主体・理解主体）の立場に立つ

という理念を失ってしまったように見える。

現代は言語コーパス全盛の時代である。コーパスは適切に使えば大きな研究成果が期待できる魔法の道具であるが、使い方を間違えると、偏った結論をあたかも正しい結論であるかのように導いてしまう危険な道具でもある。コーパスは人間が言語行為によって生みだした結果としての言語の集積であって、過程としての言語を扱ったものではない。コーパスという結果としての言語、「もの」としての記号だけを言語研究の対象と見なしてしまうと、過程としての言語、行為としての言語という言語のもう一つの大事な側面を見失ってしまいかねない。コーパスを用いるにしても、コーパスの背後にはそれを産出した多数の表現主体がいるという事実には自覚的になる必要がある。

「テキスト (text)」と「ディスコース (discourse)」という英語由来の概念がある。日本語の文章が書き言葉と結びつき、談話が話し言葉と結びつくように、「テキスト」は書き言葉、「ディスコース」は話し言葉を連想させる。しかし、「テキスト」には産出結果としての「もの」としての側面が、「ディスコース」は産出過程としての「こと」としての側面がある¹³。日本語の文章にも「テキスト」と似た語感があり、どうしても産出された文字列全体を想像してしまう。だからこそ、文章の「ディスコース」、すなわち産出過程としての行為の側面に注目する必要がある。

文章を文連続 (sentences) という量の側面でのみ考えると、どうしても文章の構造に目が行ってしまう。文章はたしかに文が連なって長く伸びていくものであり、長く伸びた文章を構造体と捉えたいくなる衝動は理解できる。しかし、文章をそうした量的な面から、一つの独立した構造体と捉えて分析を行うと、文章論は早晩行き詰まる。事実、1990 年代以降の文章論のある種の閉塞感、時枝 (1950) や林 (1973) の言語過程観という原点が忘れられ、行為という「こと」への自覚が希薄になってきたことに起因する。林言語学が教えるこ

¹³ Brown & Yule (1983:23-25) では、表現・理解過程としての「談話」(discourse-as-process) と、産出結果としての「テキスト」(text-as-product) が区別されている。

とは、文の生成のなかに文章を見るという質を重視する見方と、時間の流れの中で文＝文章の組み立てを考える過程的な見方に自覚的であることである。

7 節では、林言語学継承の試みとして、「読むこと」「書くこと」「話すこと」「聞くこと」それぞれについて、文章・談話を表現・理解する「過程」を対象として可視化するささやかな試みを紹介した。多様な機器の発達によって表現・理解のプロセスを多面的に把握できる環境が整ってきた今こそ、文章論の復権のために研究者一人ひとりが文章論の原点に立ち戻り、行為という「過程」を可視化する創意工夫を凝らすことが求められている。

付記

本稿でご紹介した林四郎先生は、本年 2022 年に 100 歳でこの世を旅立たれた。直接の弟子でもなかった筆者に、80 歳を過ぎたころからたまわるようになった温かいご指導を思い起こしながら本稿を執筆した。林先生の学恩に心から感謝申し上げる。

本稿は科研費 JP21H04417、および国立国語研究所機関拠点型基盤研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」の研究成果である。

参考文献

- 相原林司(1984)『文章表現の基礎的研究』明治書院
- 青木優子 (2018)『日本語の作文教育における文章構造の研究—韓国人学習者による「まどまりの欠如」の課題—』早稲田大学博士学位論文
- 安達隆一(1987)『構文論的文章論』和泉書院
- 井伊菜穂子 (2020)「接続詞の接続領域の性質と認定基準」『一橋大学国際教育交流センター 紀要』2、pp.31-42、一橋大学国際教育交流センター
- 庵功雄(1999)「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』36、pp.3-19、一橋大学語学研究室
- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 庵功雄・石黒圭・丸山岳彦編 (2017)『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈—』ひつじ書房
- 五十嵐力 (1905)『文章講話』早稲田大学出版部
- 池上嘉彦 (1983)『談話の研究と教育 1 テキストとテキストの構造』大蔵省印刷局
- 石黒圭 (2005)「接続詞の二重使用とその表現効果」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編著『表現と文体』pp.160-169、明治書院
- 石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 石黒圭(2016)『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』実務教育出版
- 石黒圭 (2020)『段落論 —日本語の「わかりやすさ」の決め手—』光文社

- 石黒圭 (2022)「日本語学習者のフィラーの習得と評価—中国語を母語とする日本語学習者 3 名を対象にしたケーススタディー」窪菌晴夫・朝日祥之編著『言語コミュニケーションの多様性』くろしお出版
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋 (2009a)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12、pp.73-85、一橋大学留学生センター
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子 (2009b)「接続詞の機能領域について」『言語文化』46、pp.79-94、一橋大学語学研究室
- 市川孝 (1959)「文と文章論」国立国語研究所編『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』pp. 31-44、国立国語研究所
- 市川孝 (1972)「文章・文体」『国語学』89、pp.76-84、国語学会
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 井上裕之 (2021)『ニュースの談話構造の総合的研究』ココ出版
- 王金博 (2015)『論説文における接続表現の「遠隔共起」についての研究—新聞社説の「しかし」と「そこで」を中心に—』筑波大学博士学位論文
- 大島弥生 (2009)「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』11、pp.15-22、専門日本語教育学会
- 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子 (2010)「学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』12、pp.27-34、専門日本語教育学会
- 金井勇人 (2016)『JCK 作文コーパス』(<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/> 2022 年 8 月 31 日確認)
- 金岡孝(1989)『文章についての国語学的研究』明治書院
- 鯨井綾希 (2015)『文章中で用いられる同一語句のくり返しの定量的研究』東北大学博士学位論文
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- 甲田直美 (2001)『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房
- 阪倉篤義 (1962)「文体・文章」『国語学』89、pp.77-81、国語学会
- 佐久間まゆみ (1979)「現代アメリカ人のパラグラフ意識」『人間文化研究年報』2、pp.97-108、お茶の水女子大学人間文化研究科
- 佐久間まゆみ (1999)「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48、pp.1-22、日本女子大学
- 佐久間まゆみ (2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店、pp.119-189

- 佐久間まゆみ(2003)「文章・談話における『段』の統括機能」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店
- 佐久間まゆみ編(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 佐藤喜代治編(1991)『文章研究の新視点』明治書院
- 清水まさ子(2010)「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペクト的な観点からの一考察—」『日本語教育』147、pp.52-66、日本語教育学会
- 佐治圭三(1987)「文章中の接続語の機能」山口明穂編『国文法講座 第6巻』pp.127-154、明治書院
- 志波彩子(2015)『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』和泉書院
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版
- 高崎みどり(2021)『テキスト語彙論—テキストの中でみることばのふるまいの実際—』ひつじ書房
- 高崎みどり・立川和美・新屋映子(2007)『日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房
- 立川和美(2011)『説明文のマクロ構造把握—国語教育・日本語教育への指導・応用に向けて—』流通経済大学出版社
- 田中章夫(1984)「接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 第4巻 修飾句・独立句編』pp.81-123、明治書院
- 田中啓行(2019)「講義中に示された具体例に対する日本語学習者の理解の様相の分析—中国語、ベトナム語母語話者のノートテイキングから—」『専門日本語教育研究』21、pp.29-36
- 田中啓行・石黒圭(2018)「日本語学習者の作文執筆修正過程—中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から—」『国立国語研究所論集』14、pp.255-274、国立国語研究所
- 張子如(2015)『指示語「コ」「ソ」の文章論的研究—小説における機能を中心に—』同志社大学博士学位論文
- 塚原鉄雄(1966a)「論理的段落と修辭的段落」『表現研究』4、pp.1-9、表現学会
- 塚原鉄雄(1966b)「基本段落と段落連合」『人文研究』17-2、pp.1-32、大阪市立大学文学部
- 塚原鉄雄(1970)「接続詞—その機能の特殊性—」『月刊文法』2-12、pp.10-18、明治書院
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3、明治書院
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編(1990)『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう
- 董芸(2021)『日本語学習者の縦断作文コーパスにみられる接続表現の習得の諸相—中国国内の大学で学ぶ日本語専攻生の習得過程をめぐって—』一橋大学博士学位論文
- 時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店

- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 時枝誠記(1951)「文章論の一課題」『国語研究』8 愛媛国語研究会(山口仲美編(1979)『論集日本語研究8 文章・文体』有精堂所収)
- 時枝誠記(1960)『文章研究序説』山田書院
- 時枝誠記ほか(1960)「文章論の総合探求」『国文学』5-9、學燈社
- 友定賢治編(2022)『感動詞研究の展開』ひつじ書房
- 友定賢治編(2015)『感動詞の言語学』ひつじ書房
- 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書院
- 長田久男(1995)『国語文章論』和泉書院
- 永野賢(1959)『学校文法文章論』朝倉書店
- 永野賢ほか(1969)「特集 文論・文章論」『月刊文法』1-3、明治書院
- 永野賢(1972)『文章論詳説—文法論的考察—』朝倉書店
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 永野賢編(1986)『文章論と国語教育』朝倉書店
- 西田直敏(1992)『文章・文体・表現の研究』和泉書院
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法7 第12部談話 第13部待遇表現』くろしお出版
- 野田尚史(1989)「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 野村眞木夫(2000)『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 萩原孝恵(2012)『「だから」の語用論—テキスト構成的機能から対人関係的機能へ—』ココ出版
- 朴恵煥(2011)『韓国人日本語学習者の要約作文における文章構造の理解と表現—日本語母語話者との比較—』早稲田大学博士学位論文
- 馬場俊臣(2003)「接続詞の二重使用の分析—用例と各接続類型の特徴—」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』53-02、pp.1-17、北海道教育大学
- 馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現—指示・接続・反復』朝倉書店
- 馬場俊臣(2010)『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—』おうふう(最新のリストは、<http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/baba/home/setuzokusi.htm> で閲覧可能。2022年8月31日確認)
- 土部弘(1973)『文章表現の機構—国語教育の実践原理を求めて—』くろしお出版
- 林四郎(1960)『基本文型の研究』明治図書
- 林四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- 林四郎(1982)「臨時一語の構造」『国語学』131、pp.15-26、国語学会
- 林四郎(1983)「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座5 運用I』pp.1-45、朝倉書店

- 林四郎(1990)「文の成立事情—文章論的文論への序説—」『国語学』160、pp.40-50、国語学会
- 林四郎(1998)『文章論の基礎問題』三省堂
- 平田悦朗(研究代表者)(1997)『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発』1994～1996年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- 布施悠子・石黒圭(2018)「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由—上級中国人学習者、上級韓国人学習者、日本語母語話者の作文の比較から—」『国立国語研究所論集』15、pp.17-42、国立国語研究所
- ベケシュ、アンドレイ(1987)『テキストとシンタクス—日本語におけるコヒージョンの実験的研究—』くろしお出版
- 宮地裕(2003)「文章・談話の重層性」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店
- 前川孝子(2021)『日中の意見論述文章における文章規範の対照研究』筑波大学博士学位論文
- 宮澤太聡(2014)『接続表現とノダの統括機能に基づく文章・談話の展開的構造—大学学部留学生のための講義の理解と新書の読解—』早稲田大学博士学位論文
- 村岡貴子・米田由喜代・大谷晋也・後藤一章・深尾百合子・因京子(2004)「農学・工学系日本語論文の『緒言』における接続表現と論理展開」『専門日本語教育研究』6、pp.41-48
- 村岡貴子(2014)『専門日本語ライティング教育—論文スキーマ形成に着目して—』大阪大学出版界
- メイナード・K・泉子(1997)『談話分析の可能性』くろしお出版
- 森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編(1963)『講座現代語5 文章と文体』明治書院
- 森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編(1968)『作文講座4 文章の理論』明治書院
- 森田良行(1969)「文章論のめざすもの—その効用—」『月刊文法』1-3、pp.70-74、明治書院
- 森田良行(1993)『言語活動と文章論』明治書院
- 山崎誠(2017)『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』和泉書院
- 李在鎬編(2017)『文章を科学する』ひつじ書房
- Brown, G. and Yule, G. (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge: Cambridge University Press
- Halliday, M.A.K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.